２０２１年3月２５日（木）

老球の細道６０１号

心から支援してくれる人

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

ボケ防止のために毎朝英語の本を３０分くらい読むことを日課にしている。どうせ読むならとバスケット関係である。今は米国に行った時に購入して積読してあったステイーブ・アルフォード（ロス五輪金メダリスト）がインデイアナ大学（IU）時代に指導を受けたコーチ、ボビー・ナイトについて書いた『PLAYING　FOR　KNIGHT』を読んでいる。

ボビー・ナイトは、私と同世代のコーチ達にとってはカリスマ的存在で元米国インデイアナ大学のヘッドコーチだった。IU 時代 NCAA 選手権で３回全米チャンピオンに輝き、１９８４年のロス五輪では、あのマイケル・ジョーダンを擁して金メダルを獲得した米国チームのヘッドコーチも務めた。当時米国では天才コーチと呼ばれ、日本でも多くのコーチの憧れのまとだった。もちろん私もその一人である。デユーク大学のコーチ K は彼の教え子（陸軍士官学校時代）の１人であることは有名である。

ナイトは非常に気性が激しく、誰とでも平気でぶつかる武闘派コーチであった。選手も彼の激しい気性に神経をすり減らしながら指導を受けていたという。必然的にナイトは常に孤独を恋人にする日々であった。誰も近づかないナイトであったが、彼が心を寄せ、教えを乞う人々が全米各地に何人かいた。いずれも年上である。そんな中で特に信頼を寄せて教えを受けたのがピート・ニューエル（NCAA 優勝、ローマ五輪優勝の H・C、前東京五輪の日本アドバイザー。私は学生時代金沢で指導を受けたことがある）とヘンリー・アイバ（日系人。東京五輪、メキシコ五輪優勝、ミュンヘン五輪「幻の３秒」の H・C）だった。彼等も何かあるとナイトに電話をかけ、IU まで練習や試合を見に行っていたようである。

この本を読んでいて、昔抱いていたボビー・ナイトに対するカリスマ性は薄らいだが、勝負にかける執念と指導に対する厳しい信念には敬服する。相手チームだけでなく、マスコミや多くの人を敵にしながら、孤独を恋人に持つコーチには心底心の許せる支援者が必要であった。ピート・ニューエルとヘンリー・アイバはまさに最適の支援者だった。ピート・ニューエルとは共著で『ウイニング・バスケットボール』（大修館）を出版している。

私にも会津高校での現役コーチ時代このような支援者が存在した。直之勝氏である。元会津高校バスケットボール OB 会長で、私がいた時代はアシスタント・コーチとして物心両面で絶大なる支援をしていただいた。私より１０歳以上年上の大先輩である。家業をやりながら、放課後になると毎日練習始まりから終わりまで私と共にコートに立ち選手たちを指導してくれた。県外遠征、アメリカ遠征などすべての遠征試合に同行し、寝食を共にしながら私と後輩たちの面倒を見てくれた。今の時代では考えられないような存在である。

指導者は、一人ではたいしたことはできない。孤独と多くの批判の目を背中に浴びる毎日が続く。教えを請い、すべてを受け入れてくれる支援者が必要である。そのような支援者が現れるためにも熱意、誠意、そして創意を尽くして日々奮闘しなければならない。